

金環日食観察への対応は適切であったか？ - リスク・コミュニケーション面からの一検証 -

Y26a

縣 秀彦 (国立天文台)

2012年5月21日の日食では、ウェザーニューズの発表によると当日7時45分時点で全国の63%で日食が見えたという。日食の経過時間を考慮すると、これより多い7割程度の地域で晴れ間から日食が見えたと考えられる。日食グラスや書籍・雑誌等の売り上げ、用具の買い置きや複数名でシェアしての観察、当日の天候等から推論すると国民の2割程度が日食を目撃したと思われる。

太陽を観察することは目に障害を生じる危険を伴う。例えば、1912年のドイツ日食の際には、3,500名の日食網膜症患者が発生している(尾花他,2011)。さらに今回は月曜日の朝の天文現象のため交通事故も心配されていた。いかにこれらの事故を減らすのか、今回、天文コミュニティは、日食を通じての科学普及と共に、どうリスクを回避するかというリスク・コミュニケーションとしての対応が要求された。

国立天文台では、国内関係機関・団体と協力して、日食に関する情報提供、特に安全な観察を広く呼びかけた。一方、日本天文協議会2012金環日食日本委員会、日本眼科学会、日本眼科医会も文科省への情報提供やポスター配布など目の安全を訴える啓発活動を展開した。

今回のこれらの活動をリスク・コミュニケーションの立場で検証し、今後の天文・宇宙に関する情報提供におけるリスク管理や、天文情報を適切に市民に伝える上での問題点を考察する。

引用文献： 尾花明他，2011，日本眼科学会雑誌，115(7)，589-594